

ポスト「ポストコロニアル」総合に向けて

平 田 雅 博

ポストコロニアル研究と新しい帝国史

ブリテン (Britain, British の訳語として以下では既存の邦訳書のタイトルなどを除き「ブリテン」と統一する) 帝国史研究に対する「ポストコロニアル研究」の侵入とその後の経過について、デー・ケネディは以下のように表現している。^①

幾人かの歴史家にとって、奇怪な言語、難解な理論を携えたポストコロニアル研究の到来は、野蛮人の侵入にも似ていた。歴史家たちは、バリケードを固め、外部からの侵略者に対して学問分野を守ろうと決意した。要塞はいまや縮小しているものの、いまだに胸壁をパトロールする者もいる。ポストコロニアルイズムは、歴史学の境界に時間をかけて浸透し、「先住民」と混合してきた。抵抗する重要な孤立地帯と不同意点はいまだに残るが、外部からの侵入者に対するこの学問分野の立場はおおかたでは疑念や敵対心から寛容どころかいまや親交にまで至っている。

ブリテン帝国史、それはかつて、公文書と国家の政治・軍事・経済的な関心を強調する、厳密な実証主義に基づくもつとも頑固で旧弊な分野

であった。それだけに、この分野ほど変化が劇的だったものもなかった。ブリテン帝国史とポストコロニアル研究との間の分断は、当初の一〇年ほどはあまりに大きかったために、この両者の架橋はほぼ不可能であった。ところが、一九九〇年代半ば以降になると、ポストコロニアルイズムは、現行の帝国史が意味ある問題を提起しなくなったと感じた一団の研究者の琴線に触れた。それ以外の研究者はポストコロニアル研究の利点に懐疑的なままであったが、彼らもポストコロニアル研究の挑戦に答えるべく自身の研究の再考や再設定の必要性を見出した。その結果、帝国史の著しい復興が起こり、これを現在の歴史学内でのもつとも活発で知的に活性化している分野に転化させたのである。

この伝統的な「古い帝国史」への侵入者としての研究者集団は、二つの旗印を掲げて行進してきた。その二つとは「ポストコロニアル研究」と「新しい帝国史」である。一つ目のポストコロニアル研究の代名詞にもなり得るのはエドワード・サイードの『オリエンタリズム』（一九七八年^②）である。主流のブリテン帝国史家は、当初サイードとその系列

の著作に敵意をもって対応した。しかし、ポストコロニアル研究は、とくに過去と現在との間のはっきりした関連を引き出したために帝国の過去への視点を提供し、しだいに多くの賛同者を引きつけていった。すなわち、言説次元の帝國的権力——自身の社会にある概念上のカテゴリーや意味の体系を他の諸社会に押しつける能力——は脱植民地化後にも消滅せず、現在の態度や行動にも継続していると論じた。このことは帝国が消滅したために帝国史家の仕事からも大方は消えてしまった帝国の研究に妥当性を与えた。これが『オリエンタリズム』が成功した理由である。いまやポストコロニアル研究が帝国文化にかんする学問的提起の着実な潮流を生み出したことを無視するのは不可能となっている。⁽³⁾

もう一つの「新しい帝国史」の創生には、ポストコロニアル研究におけるサイドのような単一の個人名は見いだせない。だが、初期の提唱者たちに共有された確信は、自己完結的な「島国の物語」としてのブリテン史の通常の物語に対して、それは実は帝国によってその進路と性格が形成された複数の方法を認識し損なったものだ、というものだった。これはブリテンと帝国との関係、あるいはブリテン史とブリテン帝国史は相互構築的であった、との改めて見出された確信であった。その主たる意図は、ブリテン諸島を帝国の物語に引き入れて、国内領域自体がいかに帝国利害や植民地属領によって形成されたかを示すことであった。アン・ローラ・ストローラーとフレデリック・クーパーが言うように「ヨーロッパは帝国のプロジェクトにより形成された」のであれば、ブリテンほどこうしたプロジェクトによって深くえぐられて作られた国も

なかった。こうした「本国と植民地を単一の分析範囲」におく試みは「新しい帝国史」と一体化していると見なされ、たとえばムリナリニ・シンハは「本国と植民地をまとめる」ことを課題にし、実際にも、ブリテンとインドの双方を包摂する「帝國的な構成体」の中で植民地的男性性のイデオロギーが発達したことを分析した。⁽⁴⁾

こうした本国と植民地、中心と周辺の間を再興し、ブリテン史をブリテン帝国史の関係を再構築するだけならば、主流にある従来の帝国史家、たとえば「ジェントルマン資本主義論」のケインとホプキンズも同じ目的を追究したというべきだが、彼らの尽力はそれ以前のギャラハーとロビンソンが奨励していた周辺視点から、イングランド (England, English の訳語、以下同じ) 中心的な視点に振り子を戻したにすぎなかった。「新しい帝国史」、およびこれに着想を与え続けるポストコロニアル研究が、これと決定的に違うのは本国と周辺の間相互交換の接点を追跡し、帝国主義とは両者の相互作用の過程であることを立証し、相互作用の中でもっとも残存しもっとも深い遺産である文化的次元——すなわち自己と他者の相互表象といった領域——を評価することである。⁽⁵⁾

一 制度からアイデンティティーへ

(1) アン・ローラ・ストローラー

ポストコロニアル研究が歴史家にとって「奇怪な言語、難解な理論」と見なされ、しばしば「韜晦趣味」とも「ジャーゴンだらけ」とも言わ

れるのは、それがもともと歴史学とは分野を異にするポスト構造主義思考からの影響を受けた理論だからである。当初から理論自体を無用と見なしはなから受け付けない実証オンリーの歴史家もいる。彼らはしばしば、歴史と理論を相敵対するものとみなし、理論的考察に依拠する歴史研究には疑義を抱くと非難する。しかし、もともと厳密に実証的な研究ですらいくら粗雑でも理論、もしくはそれに引き着く前提に依存している。これに照らせば、問題は、歴史対理論、もしくは歴史か理論かの二者択一ではなく、歴史研究にとってある理論がもう一つの理論に対していかなる利点があるか、ということになる^⑥。

ただし、歴史学とは異なるもので確かに分かりやすいものではない。以下では、いささか図式化や単純化の傾向は否めないものの、ポストコロニアル研究と新しい帝国史の特徴を知るために、とりわけ、旧弊たるブリテン帝国史とのハイブリッド化によって、ポストコロニアル研究は歴史学にいかなるインパクトをもたらしたかを理解するために、その特徴とインパクトの具体例を、何々から何々へと変化しつつある、という方向性を持たせると分かりやすくなると考えて、これもすでに見ているケネディの著書に収められた複数の論文をもとにして、以下のように五つほどに整理する。

第一は、「制度からアイデンティティーへ」である。これは、たとえば、植民地における混血により、白人がヨーロッパ人としての人種のアイデンティティーが脅かされるといった場面を分析する時に、適用される。第二は、「政治から文化へ」への流れである。ポストコロニアル論

的転回が生み出したものは、軍事や政治（あるいはそれらと絡んだ物質的な諸力）を強調する説明から、文化的イデオロギーの要因に力点を置く説明へと重点を移動させた。第三は、「エリートからサバルタンへ」である。帝国のエリートの意図（当局者の意図）から植民地臣民（あらゆる種の「サバルタン」）の経験へ、という方向である。その他に、第四として、研究者が白人男性のブリテン人歴史家から、非白人、女性、アメリカの非ヨーロッパ諸国出身者に変化した。第五に、研究の時代背景としての冷戦から冷戦終結、グローバル化の時代に変化したことも指摘できよう。このうち以下で検討するのは、上記の上から三つである。

ポストコロニアル研究がブリテン帝国史家（とりわけその主流にはないと自覚する研究者）を引きつけた主要な方法の一つは、アイデンティティー、とくに人種やジェンダーのアイデンティティーの問題への接近方法であった。ポストコロニアル研究は、文化と権力の交差を強調し、人種、ジェンダー、階級、宗教、その他の「差異」に決定的な役割を与えた。

ここでアイデンティティーとは何か、をジョナサン・カラの訳書の一節で確認しておくと、アイデンティティー、言い換えると、「私とは何か」「私が私であり続けるもの」をどう見るかは、「私」とは①与えられたものか、②作られるものか、自己とは③個人的なものか、④社会的なものか、の四項の組み合わせで異なったものとなる。とくに、①与えられたものと④社会的なものの二項を組み合わせ、自己はその起源と

社会的な属性によって決定されることを強調する考え方をとると、人は「男か女、黒人か白人、イギリス人かアメリカ人等々であることになり、そのことが主体あるいは自己にとつての第一次的な事実、所与となる」⁽⁷⁾。こうしたジェンダー、人種、国民が自己の第一次的な所与となるという見解は、本稿でいうアイデンティティーの考え方に近い。

ジェンダー、人種、国民、その他の「差異」をもとにしたアイデンティティーに関わる歴史家は多く登場したが、最初に見てみるのは、アン・ローラ・ストローラーの仕事である。⁽⁸⁾ ストローラーの博士論文『プランテーションの社会史』の研究対象は、一九〇二世紀のオランダ領東インド帝国、とりわけスマトラ島デリであり、ブリテン帝国ではない。しかし、二〇〇二年刊行の『肉体の知識と帝国の権力』ではブリテン帝国を含む広くヨーロッパの帝国史に触れている。この著書での関心は、親密なるもの（私的な生活空間での、誰と一緒に住み、どこで生活し、何を食べ、どのように子供を育て、家庭で使用人や家族に何語を用いるか、といったこと）である。より具体的な対象は、植民地でのセクシュアリティ、すなわちヨーロッパ人男性と同棲関係における同居愛人、売買春における娼婦（同居愛人も娼婦も「アジア人」「アフリカ人」「有色人種」「黒人」というラベルを貼られた）との関係、これが社会問題ないし政治問題となる二〇世紀初頭の危機への対抗手段としてのヨーロッパ白人女性の渡航、男性雇用者が使用人に強制的ないし金銭的に労働させることでまかなわれた家事労働、「人種の異なる」結びつきから生まれた混血児、「現地化した白人」すなわちヨーロッパ的な文化的規範か

ら逸脱してしまった男性、および現地の食事や現地のやり方に過度に慣れてそれらに通じてしまったヨーロッパ人の子供である。⁽⁹⁾

植民地におけるセクシュアリティの研究はまったくなかったわけではなく、マッケンジー帝国主義研究シリーズの一冊⁽¹⁰⁾もあり、ストローラーも「ロナルド・ハイアムといった植民地を研究対象とする何人かの歴史家は……帝国の拡張それ自身が男性の性的エネルギーのはけ口であったことを示唆してきた」が、これのみでは「植民地に輸出されたイギリスやフランスの上品な秘密といった帝国史の怪しげな裏面」に終わりがねず、これとは研究の目的と方法はまったく異なる、と説明する。

ストローラーが力点を置くのは、植民地における「混血」児の存在により、白人「ヨーロッパ人」としての人種のアイデンティティーが脅かされる問題、「オランダ人」や「ヨーロッパ人」といったはつきりしたカテゴリーにいる人間にも、「困窮白人」や「混血」といった判然とはしないカテゴリーにいる人間にも、いずれも同じようにあてはまる、植民地における分類上の差異の問題、「どちらにもころぶ可能性があり、かうじて両者のあいだにとどまることもありうるカテゴリー」「つねに定められたものであるとともに流動的であり、明確であるとともに変幻自在に変化し、受け入れられるものであるとともに融通がきく人種化されたカテゴリーがはらむ矛盾と政治的帰結」である。⁽¹¹⁾

ストローラーが「明らかにしたいのは、植民地運営においてなぜ親密なるものがこれほど重視され、性に対する配慮がこれほど問われたのか」ではあるが、親密なるものを重視するからといって、マクロの次元を無

視するものではない。たしかに「性を考えること、つまり誰が誰といつどこで関係するのかを考えることは、支配のミクロな次元に近づくこと」ではあるが、「支配する者とされる者の性行為の管理が植民地社会秩序にとって根本的に重要だったのであり、セクシュアリティに関する言説は植民地の人々を特定の人間の種別へと分類する一方、帝国支配における家庭を隔々まで管理していたという前提」であつたために、ミクロの次元だけではなく、「同時に植民地主義のマクロな政治学についてわれわれが知っていると考えていることの再考を意味するという論点」に取り組むことも重要である。じつさい、「家族圏や親密圏のようなミクロな場所がどのようにして、そしてなぜ帝国支配のマクロな政策にはつきりと登場するのかというテーマ」こそ「すべての章に一貫して明らかな理論的テーマ」なのである。¹²⁾

上述から直ちに理解できるように、これはフーコー理論、とりわけミクロな次元の権力論との親和性が明らかである。フーコーに魅了されるあまり一書を書き上げているし、『肉体の知識と帝国の権力』にも「フーコーを植民地的に読む」と題された第六章が組み込まれている。ここでは、一般には、フーコーは「西欧」のみに関心があり、植民地や人種問題とは無縁であるとの定説を覆し、フーコーの講義録から「植民地での実践が、西欧の法的・政治的構造にはね返ってくる効果」に触れている箇所や「人種主義はあらゆる近代国家において生権力の発展の仕方的基础である」とのフーコーの主張を提示している。それどころか、『性（セクシュアリティ）の歴史』¹³⁾の中でも無視されてきた「セクシュ

アリティの歴史と人種の構築をフーコーが戦略的に結びつけ」ている重要な箇所も指摘して、この本は西欧ばかりか「一九世紀帝国世界に語りかける」本である、と述べる。¹⁴⁾

ストラーが依拠するのはフーコーばかりではない。自身が記すとおり、「植民地支配における人間の分類範疇にたいする関心はいくつかの方面からはじまった」として、第一は、マルクスからイギリスにおける労働問題の歴史的研究（E・P・トムソンとダグラス・ヘイズ）をへてサバルタン研究にいたる系譜、第二は、グラムシとフーコーをへてサードにいたる系譜、第三に、植民地政府による統計やさまざまな表象にたいする人類学と歴史学を統合したバーナード・コーンの研究と、これを取りあげたアパデュライ、ニコラス・ダークス、プラカシユなどを挙げている。自身は「政治経済的側面、すなわち植民地期のインドネシアにおける労働管理の戦略を可能にした人間の分類範疇にまず関心をいだき、支配をもたらした多岐にわたる人間の分類範疇や人種の認識論へと関心を移した」としている。¹⁵⁾

ここから、フーコーへの関心はグラムシからサードへの系譜の中で生まれたことが分かるとともに、マルクス、トムソンからサバルタン研究への系譜やコーンからバークスらへの人類学の系譜も影響を与えていることから、それぞれポストコロニアル研究、サバルタン研究、人類学的歴史学の系譜との親和性がわかる。しかし、それより重要なことは当初から「労働管理」をみる上での「政治経済」に着目していたことかもしれない。この点は、古くから存在する「政治経済」の潮流とこれらの

新たな潮流との統合を考えていくのに大事なポイントとなるので後段でも触れることになる。

(2) アイデンティティーを求めて

ストーリーの仕事は、ラタ・マニ、ムリナリニ・シンハ、フィリッパ・リヴィンの仕事とともに、「ジェンダー、人種、セクシュアリティの文化的利用に焦点をあてた」「アイデンティティーに関するもつとも興味深い研究」である。彼女たちは「現行の帝国史が意味ある問題を提起しなくなったと感じた」歴史家たちであり、ポストコロニアリズムが彼女たちの「琴線に触れた」のである。ただし、ポストコロニアル研究の目的と方法を採用したのは、彼女らに留まらない。それはとくにフェミニスト歴史家にあてはまり、そのジェンダー問題への関心は、女性の役割や機会を明らかにする言説実践や制度的な構造への注目にますます向けられた。中流階級女性が、海外でのブリテンの文明化の使命、とくに悲惨でよるべきインド女性を抑圧的な社会から解放する仕事に関与した「帝国市民」としてのアイデンティティーを構築することによって諸権利を要求したことを示したアントワネット・バートンと、キャサリン・ホール、キャサリン・ウィルソンなどが挙げられる¹⁹⁾。

とくにホールは、かつてイングランドの中産階級文化の女性を検証していた歴史家²⁰⁾だったが、「帝国論的転回」後の仕事では、解放後のジャマイカでの元奴隷の生活を転換させようとしたバーミンガムのバプティスト派の宣教師について、豊富な文献を駆使して研究した。そこでは、

人種、ジェンダー、宗教、その他のアイデンティティーのカテゴリーが、本国と植民地において相互に形成されていく差異の構築を通じて再構成されていくことが立証された²¹⁾。

歴史家に大きな関心を引きつけたアイデンティティーに関わるもう一つの問題は、植民地国家が利用した、臣民を定義し差異化する「分類の権力」である。この権力は、臣民が過去に承認し採用していた以上に厳格で相互に排他的なカテゴリーを押し付ける。人類学者バーナード・コーンは、歴史と人類学の関係に関心を持ち、近代初期から近代の南アジア史に帝国史をもたらし帝国史を再形成した重要人物である。中心的な関心は分類システムの展開でインドが支配の新たな技術の実験場として使われた方法であった。この分析のための基礎的な仕事の多く、たとえば、インド人を数え上げて分類する植民地センサスやその他の国家事業についての研究を行った²²⁾。

こうした研究は直ちにサイードを想起させるが、サバルタン研究の代表的な歴史家の一人であるデイベシュ・チャクラバオティが注記するように、サイードの『オリエンタリズム』が刊行される「はるか前からコーンはシカゴ大学の学生たちに知識と権力との関係の基礎について教えていた」²³⁾。コーン自身の論文では以下のような叙述がある。植民地統治は、直接の支配システムと同様、知の形式にも基づいていた。一七八四年に王立ベンガル協会の設立以来、インド史、インドの思考様式、宗教的信仰や慣習、社会や制度についての知識は着実に積み重なっていた。この蓄積は、法廷、歳入の評価や税徴収、情報を順序立て分類せ

よ、との命令を受けたブリテン側の実践的な経験の結果であった。²⁴ 弟子のニコラス・ダークスも、その著書でブリテン人が提示したインドのカースト制はおおかたは、インド人を分割し従属させるために、錯綜して移ろいゆく一連の社会的関係を歪曲し単純化したブリテン人自身の構築物であったと論じた。

さらに、身体自体がアイデンティティーを指示する研究もみられた。デイヴィッド・アーノルドと他の医学史家は、ブリテン医学によって、植民者と被植民者の両方の身体にふりかかる疾病の分類や治療における人種的差異がコード化されたことを立証した。²⁵ 身体を問題とする歴史家には、他にも、エリザベス・コリンガムやティモシー・バーク（植民地期、ポスト植民地期のジンバブエにおける石炭、家庭性、身体の規律訓練の研究）がいる。とくにコリンガムによるブリテン領インドにおける「帝国の身体」の検証は、服装、食の好み、個人的な衛生といった、ごくありふれた問題でさえも、植民者と被植民者の両方の身体をめぐるモラルの判断と同様、ジェンダーや人種の区別を設定する際の差異の重要な——しかも変遷する——目印であったことを明らかにした。²⁷

アイデンティティーに焦点をあてた研究は意外な方向に向かうこともあった。それは、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドといった白人移住者植民地における個々の「島国」植民地のアイデンティティー、およびそこでの移民とその子孫のアイデンティティーをめぐる提起された。その中心となったのは一九九八―二〇〇七年間に開催された「ブリティッシュ・ワールド論」学会に連座した新たな研究者集団

であり、彼らのアイデンティティーの展開に焦点をあてた数十年にわたる歴史研究は、移住者に見られる広範な「ブリティッシュ・アイデンティティー」への忠誠のありようを主張した。²⁸

この「ブリティッシュ・ワールド論」は、ポストコロニアル研究の方法と非西洋世界の従属帝国の「不当な」強調への批判から発生した側面もある。ポストコロニアル研究は独自の方法論や南アジアなどの従属帝国を強調した。これに対して、「ブリティッシュ・ワールド論」は、あくまで従来からの伝統的な実証主義と従属帝国以外の白人移住植民地にこだわりの、こうしたポストコロニアル研究への反動として生まれた側面があるのである。

とはいえ、ブリティッシュ・ワールド論者がアイデンティティーの問題に関心を示したこと自体は、ポストコロニアル研究が帝国史研究で生み出そうとした方向性の転換を示すものでもある。定住者社会に広く見られる「ブリティッシュ・アイデンティティー」が「ブリテン帝国」との関係で構築されたものとし、そうして作られた「汎ブリテン帝国アイデンティティー」を分析すると、「人種」の問題に直面せざるを得ない。

この白人移住植民地での人種問題が顕著に現れるのは、ブリティッシュ・ワールドの移民社会が非白人の現地人を周辺化したり、非白人の入移民を規制したりする「白人性」を要求した局面である。ここで、ポストコロニアル研究的な視野から着想する歴史家が、ブリテン移民社会の実証的な研究に影響力を発揮する。こうした歴史家の中には、白人移民と現地民の人種関係の検証に新たな分析の厳格さをもたらし、異人種

間結婚や同化から隔離や絶滅までにいたるまでの多様な相互交流を見出し、人種的差異の構築の意味を評価する者もいる。⁽²⁹⁾

実証研究がポストコロニアル研究に反発したり刺激を受けたり、反対にポストコロニアル研究が実証研究に影響を与えたりと、実証研究とポストコロニアル研究の間でのある意味でのコラボレーションの例は、ブリティッシュ・ワールド論に限ったものではない。前述したようにかなりポストコロニアル研究に傾斜したストーリーでさえ、労務管理や政治経済といった実証研究を無視しているわけではなく、当初からそれに立脚していた側面もある。

S・ベダーセンは、総括的な研究サーヴェイ「いま政治史とは何か」の中で「帝国論的転回」について好意的な評価をしており、先に触れたシンハを「多くの点でサイド的な契機の子供」とも評価している。⁽³⁰⁾しかし、シンハは、サイドの「オリエンタリズム論」のような全体的な言説の枠組みを使わずに、ブリテンの官僚はインドのナシヨナリストを自治を行う「男らしさ」に欠けると決めつけ、後者は「女々しさ」を認めつつもそれを植民地的従属のせいだとしたと、両者とも「男らしさ」と「女々しさ」という競合する観念を使ったことを立証した。シンハは、この議論の歴史的特殊性を強調し、あくまで特殊な政治闘争に基づいて男性性の主張と権力の要求との連関をえぐり出す研究をおこなった。実証研究としてマッケンジー総編集の帝国主義研究シリーズの一冊に収められた。

ケネディが繰り返し指摘するように、⁽³¹⁾ポストコロニアル研究は、ア

イデンティティーというテーマに参入していく唯一の道ではなく、社会史や文化史の主流の歴史家たちももう一つの選択肢を提供している。帝国とも関連する「ブリティッシュ・エス・ブリテン性」や「ブリティッシュ・アイデンティティー」に限っても、ジョン・M・マッケンジー自身の著作とその「帝国主義研究シリーズ」があるし、⁽³²⁾リンダ・コリーの『イギリス国民の誕生』は、ブリティッシュ・アイデンティティーの歴史的構築への関心を一新したここ数十年間のすべての研究の本源である。ただし、ポストコロニアル研究は彼女の方法に影響を与えていない。⁽³³⁾また、さらにさかのぼると、J・G・A・ポコックによる「新しいブリテン史」の膨張的理解は、近年の「ブリティッシュ・エス・ブリテン性」の帝國的次元への関心の先がけであった。⁽³⁴⁾

二 政治から文化へ

(1) テイモシー・ミツチェル

ポストコロニアル論的転回が生み出したもう一つの特徴として、「政治から文化へ」、ないし軍事や経済（もしくはこれと関連する物質的な諸力）を強調する説明から、文化的イデオロギー的要因に力点を置くことの説明に向かったことが挙げられよう。

ここでは、こうした文化研究の一つとしての「博覧会」から開始してみよう。博覧会は、重要な文化研究の事例として、たとえばマッケンジーの帝国主義研究シリーズにも取り上げられている。当シリーズでももっとも多い「文化」や「メディア」に分類すべき研究として、まずは

マッケンジー自身の『プロパガンダと帝国』をはじめとしたプロパガンダ研究が挙げられる。これに類するのは、愛国心、教育、小説、少年文学、旅行記、英雄、博覧会、博物館、広告、スポーツ、音楽、絵画、劇場、新聞などと帝国ないし帝国主義の関係の研究である。帝国の観点からは、博覧会は帝国の支配的な文化媒体の壮大な展示場である。現に、このシリーズにも世界中から物品を集めて一堂に展示する「万国博覧会」について一卷がある他、編者を構成する各論としても取り入れられている。⁽³⁵⁾

もちろん、ここでみるポストコロニアル研究の着想から書かれたティモシー・ミツチエルの著書も、現実の博覧会にも触れて、「好奇心むき出しの見物人の群れ、展示や模型の仕掛け、パノラマや透視図の仕組み、新しい発見物や商品の展示、鉄とガラスでできた建築物、分類の体系、統計の方法、講演会、見取り図、手引書」⁽³⁶⁾について記述している。

ただし、純実証研究とは異なる点は、ミツチエルが対象とするのは、以下の二つの引用のように、あくまで表象の中の博覧会、あるいは現実と表象の境界にある博覧会であることである。「意味もしくは表象の問題は……本書の中心的テーマ」であり「資本主義近代の形而上学において、世界は、物質的現実とその表象——言語、文化、その他のかたちの意味——とのあいだの存在論上の区別によって経験されている。現実が物質的で、それ自体としては不活性であり、内在的な意味をもたないのに対し、表象は非物質的、非物理的な知性の次元である。表象の性質を例示する題材として、本書はヨーロッパの植民地化事業の一環をなす、

ポスト「ポストコロニアル」総合に向けて

一九世紀の壮大な万国博覧会をとり上げ……近代主義のこの形而上学を「博覧会としての世界」と呼んで論ずる」。「物理的な仕切りが、博覧会とその外部にある現実世界とを分離し、その内部にある展示品は、文化と進化に関するヨーロッパの歴史的・地理的秩序を表現するように配列され、その秩序は博覧会に関するおびただしい数の図面、標識、手引書の中に反映されて、また再生産された。その結果として、博覧会は外部の現実世界を模倣するだけではなく、現実世界に存在する無数の人種、領域、商品の上に意味の枠組みを焼きつけるものとして立ち現れる」。

これらはヨーロッパで開催された博覧会についての非ヨーロッパ人の記述をもとにした表現である。従来の博覧会研究が圧倒的にヨーロッパ人の記述をもとにした研究が多いのに対し、ミツチエルが非ヨーロッパ人（とりわけエジプト人）が博覧会を見て記述した史料を多用しているのはもう一つの特徴である。それによると「非ヨーロッパ人たちは、ヨーロッパで、万国博覧会の時代に、あるいはむしろ博覧会としての世界の時代に出会ったのである。ここでは万国博覧会とは世界の展示ではなく、展示であるかのように概念化され把握される世界を指す」。博覧会は、もはや通常の世界の展示ではなく、展示であるかのように概念化され把握される「世界」である。そしてこの「世界」とは「博覧会としての世界」だったのである。⁽³⁷⁾

ここから舞台は博覧会が開催されたヨーロッパから「博覧会としての世界」の一部であるエジプトに移る。エジプトを対象にするといってもブリテンによる「エジプト植民地化の歴史の研究ではなく、植民地化する

る権力の研究である」。純実証研究ではなく権力の研究であることを重ねて述べる。さらにその注記によると「植民地化する」とは、ヨーロッパの存在を確立することだけのことではない。それは「新しい空間概念、新しい人のあり方、そして現実なるものの経験を産出する新しいやり方を、社会的世界に刻み込む政治秩序が普及することである」。

具体的には、一九世紀前半のエジプトの農村部の日常生活への介入（外部への移動の禁止、農業収入の制御であり、農業生産の上がりから取り分を獲得するばかりではなく、農村の生産過程に浸透し、過程を構成する要素を操作すること）、一八二〇年代のエジプト軍改革、義務教育制度の導入（学校教育は、国中のすべての若者を勤勉で従順な従者Ⅱ主体に変身させる手段を提供するとされ、一九世紀後半には、近代国家の政治にとって学校での規律訓練は決定的に重要な要素だと考えられるようになった）の分析である⁽³⁸⁾。

以上のエジプトの農村部、軍、学校の分析に使っているのは、すでに察しがつくようにフーコーの言説理論、規律訓練論である。「空間の再秩序化と監視に基盤を置く権力形態、およびそこに暮らす人びとの統率は、本質的なところで、方法的に植民地化するものであった⁽³⁹⁾」。そのうえ、西欧にしか適用できないとされたフーコー理論だが、ミツチエルは、たとえばフーコーが論じた円形Ⅱ一望監視刑務所の設置が西欧より、植民地の方で「先行していた」ことを立証している。ミツチエルは、ハイデッガーやデリダも活用しているが、とりわけ多用しているフーコー理論との親和性がみられる。

(2) 空間・場所・地理

ケネディは、上述のミツチエルの著書を、ヨーロッパの規律訓練の秩序、現実と表象を区別し「博覧会としての世界」を作る秩序に、エジプトが屈したことを描いた、とコメントしている。ポストコロニアル研究の特徴の一つは、「空間」「場所」「地理」などへの注目であり、ミツチエルの著書は、「景観の組織化」「空間の再秩序化」といった場所や地理に関連する問題提起なのである⁽⁴⁰⁾。

ポストコロニアル研究の始祖の一人であるフランツ・ファノンによる、植民地都市での区画化された二つの空間、すなわちヨーロッパ人が住む「入植者の町」、現地人が住む「被入植者の町」との二つの区分について言及した一節を、ミツチエルも引用している。「自ら〔入植者〕を秩序、合理性、礼儀正しさ、清潔、文明、そして権力の場と定めるためには、自身の外部〔被入植者の町〕に非合理で無秩序で不潔で肉欲に捕らわれ、野蛮でどどどしたものを表象してやらねばならなかった。都市は自らを現出させるために、つまり、その類例のない純正なアイデンティティを構成するために、このような「外部」というものを必要とした⁽⁴¹⁾」。こうした他者を介して自己のアイデンティティを確立する技術こそ、エドワード・サイードが「オリエンタリズム」として分析したものである。より大きな知的・政治的な文脈のなかでこのより大きな意味において現地人の市街は「オリエンタリズム」のものでなくては⁽⁴²⁾」ならなかった。サイードの「オリエンタリズム」自体が場所や地理の問題に

大きく関わっていた。

ここからは、ミツチエルを離れて、ここもケネディに沿って、ポストコロニアル研究の特徴としての「場所」「地理」の問題につなげていくと、ポストコロニアル研究による歴史学への影響力の一つは、歴史研究に着想を与えてくれる空間的前提ないし地理（ジオグラフィ）の課題である。

この課題は二つの形態をとり、一つはサイドの分析で言う、西洋を非西洋から分かつ「心象の地理学」である。サイドは、こうした西洋と非西洋の二分法の分類カテゴリーから連想される領域的空間には、権力を行使しようとする帝国言説の場としての文化的意味と政治的意義が満ちていることを示した。こうした空間の帝國的な表象へのサイド派の関心は、歴史家を歴史地理学者、文学研究者、美術史家などとの対話に持ち込み、一大研究集団を生み出した。彼らによる一連の研究はヨーロッパの探検家、官僚、宣教師などが奇妙でエキゾテックな環境に「意味」を付与した方法に関心を向けた。こうした意味としては、「熱帯」が持つ腐朽と墮落の意味、「暗黒のアフリカ」という言葉に表現される危険や欲望の意味もあり、これらをめぐる著作は、文化的に構築されるヨーロッパ人の空間や場所の観念を明らかにした。⁽⁴³⁾

もう一つの「地理」の課題は歴史研究の優先的な場として特権視される「ネーション」である。この課題は「ネーション＝国民」が余りにも特権視される歴史研究の方法への不満から提起された。これによって、国民史（ナショナル・ヒストリー）＝一國史への継続的な批判が開始さ

れ、人、慣習、思想が動き回る空間の移動性、移民、多様な循環などへの関心がもたらされた。

ブリテン植民地世界を研究するポストコロニアル研究の歴史家は、研究の空間幅を恣意的に「ネーション」を中心とする歴史学が発揮した影響力に不満を抱いており、これに対抗するために二つの戦略をとった。一つは利害やアイデンティティーが国家から切り離されたサバルタン（以下に触れるように、エリートから区別される下層階級の民衆）に直接的な関心を向けること（こうすればネーションを「断片化」することになる）、⁽⁴⁴⁾ もう一つは、関心をナショナル・ヒストリーの領域を越えたディアスポラや他の国家横断的な（トランスナショナル）過程に関心を移すことである。

サバルタン研究自体については後段で触れることにして、後者にのみ触れておくと、これに連なる興味深い一例で、太平洋史家のトレシー・パニヴァニア＝マーの研究は、植民地支配に対抗する現地島民が「集団立ち退き、拡散」し「国家なき形態の脱植民地化」を経験し追跡した。⁽⁴⁵⁾

もちろん、ポストコロニアル研究のみがこの方向を目指しているのではなく、ブリティッシュ・ワールド研究メンバーやグローバル化の経済史家もこうした「脱ネーション」の課題に取り組んでいる。また従来の実証的な社会史家、人口動態史家も、本国から外国の地へのブリテン人移民、アフリカ人奴隷、インド人年季契約奉公人などの人間の特定集団の動きを追求した膨大な研究をし、経済史家も資本と商品に関して同様

な研究をした。しかし、驚くほど注目されていないのは、人とモノの動きを可能とする国家横断的なネットワークであり、思想、制度、文化的実践を世界的に流通させる同様に重要なサービスに注意が払われていないとして、ケネディが注目するポストコロニアル研究者は、アフリカ人ディアスポラのトランスナショナルな文化的拡散を検証したポール・ギルロイ、⁽⁴⁶⁾ ブリテン植民地世界を研究する歴史家のうちではアラン・レスターとトニー・バラントインの二人である。とくに、バラントインは最初の本で思想（アリア主義）、次の本で人々（シク教徒）がいかにして帝国中を駆けめぐったか、場所を移動することに変化を遂げていく思想や人々の意味とアイデンティティーを示した。⁽⁴⁷⁾

こうした空間の再概念化の結果として、帝国権力の一方的な流れ（本国から植民地へ）をめぐる標準的な前提は挑戦を受け、帝国の「脱中心化」と呼ばれるものを生み出した。これは単に帝国権力には限界があったとの主張にとどまらず、多様な場所への権力の分散を認めることになる。また帝国の広がりには支配を強めるどころか、むしろ反植民地主義の担い手や思想の流布を助けた。帝国は、こうした思想の影響力を広げてブリテン支配に敵対する者たちに共通の基盤を提供したのではないかと、との認識も生まれたのである。⁽⁴⁸⁾

三 エリートからサバルタンへ

（１）ラナジット・グハ

ロビンソン＝ギャラハの「当局者の意図」は、帝国主義政策決定者

のエリートに着目した方法を示す言葉だった。「エリート」の対極にある言葉は「サバルタン」である。ここでは「エリートからサバルタンへ」の流れをみる開始点として、サバルタン研究の代表的な歴史家ラナジット・グハの著書『世界史の脱構築——ヘーゲルの歴史哲学批判からタゴールの詩の思想へ』を見てみよう。⁽⁴⁹⁾

まずそのサバルタンとは何か。それはイタリアの政治家にして思想家のアントニオ・グラムシが、階級分析のために使った用語で、もともと「下位の」という意味から「下層の民衆階級」を指す用語として広く使われるようになっていく。具体的には、サバルタンとは、抑圧され、主体性を奪われ、政治の表舞台には出ない人びと（貧困にあえぐ民衆、被植民者、女性、マイノリティ、移民、難民等々）を歴史にいかにして登場させるのか、彼らははたして声を出せるのか、という文脈のなかで論じられるようになった。⁽⁵⁰⁾ こうした帝国のエリートの意図（「当局者の意図」）から植民地臣民（あらゆる種の「サバルタン」）の経験に注目していく課題は、その成果の有無はいまだ問えなくとも、サバルタン研究やポストコロニアル研究のみならず、ポストモダン、オリエンタリズム、フェミニズムといったさまざまな潮流が取り組んでいるといってもよからう。

グハ『世界史の脱構築』の問いは「征服や植民地化によって奪われた過去を、植民地化された社会の人々が取り戻そうとする」にはどうしたらよいか、というラディカルなものである。まず冒頭において、「インド亜大陸におけるイギリスの至上権」は「インドの過去を横領し、それ

を土台に植民地国家の建設に利用するという独特の性格」を持っていることを述べている。この「イギリス支配の特殊性」ないし「この国家主義的な企て」は「徴税や土地に関する法律、司法制度や植民地軍の樹立、さらには西洋式教育による植民地文化の宣伝や公用語としての英語の普及など、統治のすべて」「イギリス支配の構造や経歴のすべてに関わっていた」に関わっていた。

こうした支配を可能としたのは「征服の事実とそれを可能にした実力」ばかりではない。「植民地的なあらゆる知識」に属する言語学や政治経済、旅行記や民族誌、芸術や科学の多くの本も力を発揮した。その中でも「哲学はすべて知識を包括して理解するという点で群を抜いている」。「哲学の力はその抽象性にある」ためにその「力によって、植民地主義に関わるさまざまな活動やイデオロギーが理性という注釈の下に取りまとめられて配置され」たのである。「そのような抽象化の、最も影響力を持った事例」として、グハが批判の標準を定めるのが、ヘーゲルの歴史についての著作『歴史哲学講義』である。

ヘーゲルは、この著作の一節で、哲学的な歴史の対象となるのは、「意識が朦朧とした国民」「国民の朦朧とした歴史」ではなく「国民」としての意識に目覚め、行動の意義を理解する国民の精神である、とした。これによって「『世界史』の対象として選ばれた幸運な人々は、そうではない人々とは別のカテゴリーに位置づけられた」。「そうではない人々」は「歴史を持たない人々」などと呼ばれ、「哲学的な歴史の対象」外に置かれた。国家を形成する国民を重視するために「ヘーゲルの体系

においては、国家が中心的な位置を占め」た。ここからヘーゲル的な「国家主義的な政治によって隷属させられてきた植民地的な過去をどのように表象するか」が重要な課題として浮上する⁵¹。

ここから、本書の問いである「征服や植民地化によって奪われた過去を、植民地化された社会の人々が取り戻そうとする」にはどうしたらよいか、を設定する。この「企て」は根本的な問題に迫るがゆえにラディカルである。この企てのためには、「これまで歴史叙述において当然のように学んできたものをじつくりと再考し、「これまで学んできたことを忘れる」痛みを味わう必要がある」とまで述べている。それは「植民地的な知の様式によって強制された支配の一方」である歴史叙述、「国家主義が堅固に埋め込まれた歴史叙述があまりにも成功したがために、私たち歴史研究者はついに問題の所在に気づくことすらなくなっ」ていたからである。

それでは「これまで学んできたことを忘れて」新たにいかなることを学べばよいのか。「植民地となる前まで存在していた土着のナラトロジー」、歴史叙述とはきわめて異なる方法で「歴史となりえるもの」を扱う文学、詩人タゴールに詠われたもの（日々この世界に生きてきた人間の物語としての過去）、叙事詩『マハーバーラタ』（聞き手のイニシアティブによって語りの内容が決まる、語り伝えられたお話の倉庫）であり、これらは散文から韻文へ、書かれたものから口碑や伝承への方向性転換を促す。「歴史となりえるもの」は、散文や書かれたものだけに限らず、韻文や口碑によるものも含まれるのである。これはヘーゲルのい

う「世界史」に幽閉されてきた「歴史となりえるもの」、ヘーゲルの国家主義によって「世界史」の外にはじき出された側の人々²²「サバルタンを救済しようという呼びかけ」である²³。

ケネディによると、グハは「近代歴史学を全面的に拒絶する」本書で、西洋様式の歴史をヘーゲルを起源とする本質的に帝國的な思想システムと同定し、それを拒否することを促し、『マハーバーラタ』のような伝統的な叙事詩によって喚起される奇跡を回復させる物語の立場をとるに至っている、となっている²⁴。

たしかにこの著書には、近代歴史学自体のあり方を問おうとする姿勢がみえる。これまでもヘーゲルの歴史哲学への批判（啓蒙主義や歴史主義との批判、国民国家中心主義との批判とそれに対する国家を形成できなかった「歴史なき民族」の見直しなど）は多くみられたが、それらはほとんど現行の歴史叙述や歴史学の内部で行われた批判であって、グハがいうようなこれに代替する叙事詩『マハーバーラタ』の提示までは行っていない。そうした意味ではこれまでの歴史叙述そのもののへのラディカルな批判、パラダイム転換の提言をしたとも言える。

ただ、こうしたラディカルな提言のかなり以前のグハには、サバルタンの一つである農民の声を拾う試みとして、「反乱鎮圧の文章」という論文があった。ここでは農民はただ謀反を起こした犯罪者として記述されるに留まってきた「国家の側から書かれてきた従来の歴史叙述」を分析した。竹中千春によると、「グハは役人や軍人が残した公文書の文章を紐解き、行間を読み取り、意味を裏返し、文字の隙間からその向こう

側に潜んでいた人々の一瞬の姿を捉えようとする。……記録を改めて精査し、テキストという歴史の境界線を挟んだ「書かれた歴史」と「書かれなかった歴史」を対照し、「書かれなかった歴史」の中にいた人々の声に耳を傾ける」のである²⁵。

具体的には、反乱の最中に役人や軍人によって書かれて直接性を特徴とする第一のデイスコース、少し遅れて書かれて時間が経ち、一見「中立的な」第二次のデイスコース、さらにかなりの時間が経過し、役人経験のない人やとりわけ左翼によって書かれた第三次のデイスコースの分析をしている。問題は、武器を取って救いを求める農民の闘争は正しいと論じるとき、第三の左翼の議論は自由主義的な帝国主義者のタイプの第二次コースとは袂を分かつが、左翼の議論も、宗教こそが部族反乱の核心だったことを見抜けなかった点である。反乱を起こした人々にとっては宗教的な意識こそが重要だったと認めようとしなかった理由は、植民地主義的な第一次、第二次のデイスコースを支えてきたパラダイムに、捕らわれたままだからである。右翼の「イギリスの支配」が主となる歴史や左翼の「国民」「人民」が主となる歴史のパラダイムに捕らわれたまま、いずれの場合も反乱に加わった人々が自分たちの歴史の主役であったことを認めず、結局のところ、反乱を起こす人々に固有の意識は書かれなかったのである²⁶。

反乱者の宗教的な意識は、左翼の歴史家も読み解けなかった「書かれなかった歴史」ではあるが、公文書の「行間を読み取る」ことで、サバルタンの声にたどり着こうとする。これがかつてのグハの方法であっ

た。むしろ、これはサバルタン研究に共感を寄せる研究者はもとより、サバルタン研究とは無関係のおよそ声なき声を探ろうとする歴史家の「通常」の方法になったと言ってもよい。この論文が書かれてから『世界史の脱構築』の立場にいたるまで二〇年ほど経過しており、この間で、グハは変化、ないし深化を遂げたともいえる。したがって、グハは、ケネディのいう「ポストコロニアル研究からの挑戦により、自身の学問分野の認識論的基盤への疑義を抱くようになった歴史家」の一人であることは間違いないだろう。⁽⁵⁶⁾

(2) 認識論

「自身の学問分野の認識論的基盤への疑義を抱いた」のはグハに限らない。ケネディに沿って見ていくと、そうした歴史家の中には、「植民地的なあらゆる知識」を告発して、文書館は客観的な歴史の知識を可能とする過去に関する情報の「中立的な」収納場所という見解を斥けるに至った者もいた。文書館もしょせん国家の利害や関心を反映する、国家の道具であるとの告発である。ポストコロニアル研究者の告発は文書館に限らず、センサス、土地測量、博物館といった植民地情報収集の実践や制度に対しても発せられた。⁽⁵⁷⁾ アントワネット・バートンはこの批判に、通常は私的で記憶を通じてしか伝わらない女性の観点⁵⁸ 歴史的展望を国家はくみ取れていないとのフェミニスト批評を加えた。⁽⁵⁸⁾

他の研究者も、ヨーロッパの過去を「物語」として位置づける啓蒙思想に由来する歴史的論拠から歴史学という学問分野が免れ得ないことに

注目した。ヨーロッパ以外のすべての社会の歴史はすべてこの「大きな物語」を規準として評価されてきたのである。デイベシユ・チャクラバオティが論じるには、この歴史主義的伝統によって「一九世紀の世界のヨーロッパ支配が可能となった」。この支配は、自分たちヨーロッパの歴史的経験は他の社会のための計画表を提供したという前提を設定して行われた。しかもこの計画表はヨーロッパ人しか読む資格がなかった。ただ、彼によると、歴史家がこの歴史主義を克服し得たにしても拒絶したにしても、自分たちの過去の理解と農民共同体に見出される「魅惑の過去」と折り合いを付けることはできない。したがって、近代歴史学自体は限界もあるが、依然として不可欠なままと譲歩する。⁽⁵⁹⁾

これと対照的だったのが、前述した近代歴史学を全面的に拒絶し、『マハーバーラタ』のような伝統的な叙事詩による物語の立場をとるグハということになる。現行の歴史研究を破壊しかねないグハのラディカルな勧告は、この学問分野内部からの支持者を得られなかった。チャクラバオティがとるより微妙な立場の方は大きな関心と称賛を呼んだものの、これですら一部には不安と当惑をもたらした。

ここで、改めてポストコロニアル研究によるブリテン帝国主義の新しい歴史への貢献とは何かを確認すると、それは西洋による権力の要求の知的基盤を批判した結果から生まれたものであった。西洋はなぜ権力を行使できたか、権力を要求する際の知的基盤はいかなるものだったか。これは認識論（エピステモロジー）とかイデオロギー、あるいは思想の問題である。こうした問題は、まず、ブリテンによる帝国支配のために

提供されたイデオロギー的理由付けの再評価、ついで、こうした支配の実践を確固たるものとする上で、学問分野としての歴史学自体とこうした支配との共犯性を探り出すよう歴史家を促した。

上述の通り、グハによる近代歴史学への告発は後者の共犯性に関わっていた。前者の「支配のイデオロギー」はどうだろうか。このイデオロギーのうち、ポストコロニアル理論はヨーロッパ思想の普遍的な野心——とくに啓蒙思想に表明されたヨーロッパ思想で、独自の基準に基づく合理性やヨーロッパ以外の人びとへのひな形としての近代性モデルを推進したことに責任を持つ思想——に特別な重要性をおいた。ポストコロニアル研究からの影響を受けた多くのブリテン帝国のイデオロギー研究がとくに注目したのは、一九世紀の自由主義理論家はいかにしてインドの専制的支配を正当化したのか、であった。

研究者たちは一九世紀の自由主義が帝国に順応していたことで一致している。そのうち、ポストコロニアル研究の影響をもつとも直接に帝国イデオロギーの問題に関与させようとした研究者であるウダイ・メフタは、とくにミル父子の自由主義が、インド人を大人——文脈上はブリテン人——の保護を必要とする子どもと同列視することによって、インド人への自由を制限した帝国政策を擁護したと論じた⁽⁶⁰⁾。

また、ポストコロニアル研究は、ブリテン帝国はいかなる思想を前提にして支配していたかの歴史研究——とくに帝国と近代性（モダニティ）の関係に注目した——にも影響を与えた。よく指摘されることだが、ブリテン帝国の擁護者の多くは、帝国を近代性の担い手と描いた。

近代性とは、市民社会、自由貿易、法の支配、私有財産、一夫一婦制、科学と技術であり、ブリテンの世界規模での成功に貢献したものである。この近代性モデルこそ普遍的に適用可能であるとの確信が、インド、アフリカその他のブリテン植民地政策を特徴づけており、その痕跡は脱植民地後の西洋の援助や開発にもつきまといっている。ポストコロニアル理論から着想を得た歴史家にとって、こうした普遍的な要求はヨーロッパの文化や知的な伝統の特殊な産物に他ならないと見抜くことが重要である。

ただ、ポストコロニアル研究者が開示したこうした批判はことごとく反批判も呼び起こした。その代表的なものは思想史家のムトゥによる反論である⁽⁶¹⁾。啓蒙思想は近代帝国イデオロギーとその普遍的な教義の苗床であるとしたポストコロニアル研究からの告発は、その指導的な哲学者たち（ベンサム、コンドルセ、デイドロ、ヘルダー、カント、アダム・スミスといった多く）は、ヨーロッパのはつきりと帝国膨張に反対していたとする実証的な研究者の挑戦を受けている。

また、ポストコロニアルからの挑戦を受けて実証研究が進んだ側面もある。「ブリテン帝国のイデオロギー的起源」を一六—一七世紀のブリテンに生じた「複合君主国」にまで追跡したデイヴィッド・アーミティージは、ジョン・ロックはポストコロニアル研究が言うように「帝国の思想家」なのか、を実証史家として問いかけた⁽⁶²⁾。さらにはポストコロニアル研究の研究対象は以前からの実証研究にもみられた。たとえば、自由主義が帝国に順応したとの実証的な証拠は、バーナード・センメル

などの主流の歴史家によってすでに提出されていたのである。⁶³⁾

ケネディ自身も、歴史学という学問分野とその研究実践へのポストコロニアル研究による批判に関して、二つの根拠に基づく反批判をしている。第一に、政府の文書館におさめられた歴史記録が過去の完全で客観的な考察を提供すると仮定するほどナイーブな歴史家はまずいない。文書以外の他の情報、考古学、写真絵画の視覚資料、インタビューなどの口碑も必要なのは誰でも認識している。第二に、ポストコロニアル研究で言われるサバルタンが文書には現れないというのやはり誇張である。才覚のある歴史家は文書から女性、農民、他の従属民、周辺化された人びとの情報や考察を引き出すのである。ケネディがその一例として提出するのはダーバ・ゴシユの研究である。⁶⁴⁾

四 ポスト「ポストコロニアル」総合に向けて

(1) プレ「ポストコロニアル」かポスト「ポストコロニアル」か

以上のように、ブリテン帝国史（および歴史学一般）における「ポストコロニアル論的転回」とでも呼べるものの内容を何点か述べてきたが、この転回はこれからどうなるか、その行く末や未来にも触れておこう。

まずはこれもケネディの見解によると、知的な傾向の予測は、グローバルな諸力（影響力）がかくも流動的なときは危険であるが、帝国史へのポストコロニアル研究的アプローチはけっして弱体化しておらず、その反対である。かくも多くの「新しい帝国史」家、サバルタン研究者、

帝国主義と植民地主義のポストコロニアル研究的な歴史家による研究がアカデミーに定着して、既存の研究群の上にさらに多くの研究が築かれることを期待できるのである。

しかし、歴史家がポストコロニアル研究と結ぶ関係は同じであろうか。帝国主義と植民地主義の歴史へのポストコロニアル・アプローチの初期の提唱者が、フーコー、サイード、スピヴァックといった理論家や批評家から得ていた着想は、おそらく役割を果たし終えている。反対に、ブリテン帝国世界の諸側面に関心を抱く歴史家の著作も広範なポストコロニアル研究者集団の方にも必読書となっている。学問分野間の対話こそポストコロニアル研究的な企画の特徴だったのである。

今後の課題は、過去数十年間にポストコロニアル理論の介入をかくも不可避的でかつ影響力あるものとしてきた問題意識を保持できるかどうかである。最近の国際情勢や事件は、歴史家が帝国の問題にアプローチする方法に分裂が生じることを予告している。軍事的な事象として、アフガニスタンとイラクへのアメリカの侵入は、あからさまな軍事的行使がいまだに世界情勢に果たす役割を思い起こさせたし、その後でそこで引き起こされた反乱は帝国権力の限界と帝国権力に抵抗する者たちの機知——時には冷酷さ——を思い起こさせた。ポストコロニアル研究とその歴史家の同盟者は帝国の軍事や政治的発現には適合しない。また、金融危機、すなわち二〇〇八―九年の突然のグローバル経済システムの崩壊は資本主義が未来を形成する要因との事実を警戒させた。ポストコロニアル研究はこうした経済システムの崩壊の考察にも適合しない。

それでは、帝国の軍事・経済・政治的な発現を強調するブレ「ポストコロニアル」版の帝国史に戻ればよいのか。しかし、これより可能性があるのは、帝国の歴史家が、帝国主義の物質、文化、認識論的次元を統合して、ポスト「ポストコロニアル」総合 post-postcolonial synthesisへと導く戦略を採用することである。こうした動きを示すのは、第一に、ごく最近の研究動向に見られる消費主義、日常品、物質文化への増大する注目、もう一つの動きは帝国国家のイデオロギーへの新たな着目、さらには帝国戦争についての伝統的な歴史学の目的と方法とは大きく違う、帝國的な征服、支配、崩壊に伴う暴力に最近向けられた学問的盛り上がりである。⁶⁵⁾

(2) 富山多佳夫のリンダ・コリー評価

ここからはこのポスト「ポストコロニアル」総合という言葉を念頭におき、ケネディのいう「ブリテン帝国世界の諸側面に関心を抱く歴史家の著作は、広範なポストコロニアル研究者集団の方にも必読書となっている」という指摘を受けて、今度は、歴史書を読む、日本の文学理論家、富山多佳夫から見たブリテン帝国史研究に着目してみよう。

富山は「ポストコロニアル批評」という場を共有するバレスチナ出身の男性とインド出身の女性」の著作、すなわちサイードの『文化と帝国主義』⁶⁶⁾とスピヴァックの『ポストコロニアル理性批判』⁶⁷⁾を検討しつつ、「この二人の仕事が指さす方向に重要な第三の道をつけ加える」のが前掲のリンダ・コリーの『イギリス国民の誕生』であるとして、その中の

「イギリス人」[ブリテン人≡引用者]らしき (Britishness) の創造は、あまりにもはつきりとプロテスタンティズム、対仏戦争、帝国の獲得とむすびついていた⁶⁸⁾との箇所を引用している。

そして「決定的に重要な」こととしてここでの「対仏戦争」とは、「英仏海峡を場とする対立にとどまらず、植民地におけるフランスとの衝突も含んだこと」、「すなわち植民地の支配権をめぐるブリテンとフランスとの抗争でもあった、と指摘している。しかも「サイードやスピヴァック、あるいはその影響下にあるポストコロニアル系の研究者の死角となりやすいのがこの点である」としており、「帝国という歴史上の、そして現代のシステムを理解しようとするとき、最も大きな可能性は、これらの二つの方向からの研究」[ポストコロニアル研究とリンダ・コリーの研究≡引用者]が交差する場にあるように思われる」。

ポストコロニアル研究の「死角」は、英仏間の「植民地の支配権」をめぐる世界的な抗争であるとするならば、コリーの言葉では「対仏戦争」もそうだが、むしろ的確な表現はそのすぐ次に来ている「帝国の獲得」である。リンダ・コリーが、ここに着目し、帝国史家としての本領を発揮して「北アメリカでも、西インド諸島でも、アフリカでも、アジアやヨーロッパでも、「英仏の≡引用者」両国の入植者や軍隊が、空間と支配権を争って角をつきあわせた」⁶⁹⁾経過を叙述したならば、まさにポストコロニアル研究の死角を埋め合わせたことになる。

富山はコリーのもう一つ作品『虜囚』⁷⁰⁾についても、これは「フリーの言説の歴史学、サイードの表象の歴史学のもつ可能性を、ひとり

の職業的な歴史家が正面からうけとめた成果」であり、「伝統的な実証主義による歴史叙述ではなく、むしろ文化表象の歴史学」の作品であると評価している。⁽⁷⁾

コリーが「ひとりの職業的な歴史家」であるのは確かなこととして、その仕事「伝統的な実証主義による歴史叙述ではなく、むしろ文化表象の歴史学」かどうか。『イギリス国民の誕生』ではブリテン人らしさ、『虜囚』では世界中で囚われの身となったブリテン諸島出身の人々のイギリス人らしさ、スコットランド人らしさ、ウェールズ人らしさ、アイルランド人らしさと、いずれもそれぞれの「アイデンティティ」を追求したものであることは間違いなく、この一点のみ持ってしても、文化表象の歴史学、ひいてはポストコロニアル研究との類似性は認められると見ていいだろう。

(3) リンダ・コリー「いま帝国史とは何か」

ただし、ケネディは『イギリス国民の誕生』をもって「ポストコロニアル研究は彼女の方法に影響を与えていない」と見ており、富山の評価とは異なる。この両者による評価の違いがポイントとなる。そこで、ポストコロニアル研究に対してコリーはいったいかなる見解を持っているかが気になってくる。それについて格好の参考となるのはカナダイン編『いま歴史とは何か』に収められた研究サーヴェイ論文であるコリーの「いま帝国史とは何か」である。⁽⁸⁾

この論文の冒頭では、一九七〇年代初めのブリストルの学部学生時代

ポスト「ポストコロニアル」総合に向けて

にいたっていた「ブリテン帝国史」の「特徴」に対して反発していたことを告白している。帝国史の「特徴」とは、第一に、他の科目、たとえばブリテン史やアメリカ史とはまったく無関係に「区画化されていた」こと、第二に、教えるのも学ぶのも男性に限られて、明らかに「男性の仕事」であったことである。ここから学部学生時代のコリーは、帝国史は「異質で特殊すぎ——白状するが——かび臭くて私の好みではないと判断」したのである。「帝国史は当時の私にとって、条約、条約制定者、外交、行政、農業、貿易の研究にきわめつけの熟練家のように没頭し、奇妙な戦争、鉄道建設、あるいはボーキサイト鉱床にごくたまに息抜きをする、高級なつや出しというよりつや消しの歴史に思えた」のであった。これは、同論文の注にもあるように、コリーに限らず、一九六〇年代から七〇年代初頭に形成されていた学部学生の認識であった。この「かび臭くて私の好み」でなかったブリテン帝国史は、富山のいう「伝統的な実証主義による歴史叙述」とは一致しないにしてもかなり近いと見てよい。

ところが、三〇年ほど経過して、帝国史のシーンは一変した。コリーは本章でも見ている同じケネディの二つの論文を引きながら、「ポストコロニアル研究者」が、「考古学者、美術史家、地図学者、女性学者、地域研究者、医学史家、思想史家、文学研究者」などとともに帝国史に「豊富な新しい知見や洞察」をもたらし、「まったく斬新な研究方法」ばかりか、「旧来のしばしば非常に価値の高い研究を再点検・再評価しうる方法をも可能にした」と述べている。これは、夫君の同書の編者であ

るキヤナダインが同書序文で「一九六〇年代の歴史学のシラバスでは周
辺的な科目に思われた「帝国」史は、ポストモダンイズムやポストコロニ
アル研究の影響力によって、形態転換を遂げ魅力が高められて、ナショ
ナル・ヒストリーとグローバル・ヒストリーの間をつなぐ不可欠の架け
橋を提供して、いまでは舞台の中央に躍り出ている」と叙述している風
景である。²³⁾

コリーはこの帝国史の変貌に寄与したポストコロニアル研究を評価し
ながら、その代表であるサイドを批判もしている。サイドが「近代
ヨーロッパの帝国主義」が構造においても過激さにおいてもそれより以
前のあらゆるタイプの海外支配とも異なることを指摘しながら、非ヨー
ロッパの諸帝国との比較は省いている点を「西ヨーロッパ諸帝国の構造
的で根本的な違いを主張したところで、それは自己主張止まりなのであ
る」と、批判している。すなわち、「近代ヨーロッパの帝国主義」は、
非ヨーロッパの諸帝国である、中華帝国、ムガル帝国、サファヴィー
帝国、そして決定的に重要なオスマン帝国とただしく比較する必要があ
るというわけだ。

もう一つは「具体的な要素をはずし、代わりに、認識論や人種に関す
る事がらに集中する傾向」により「時には無益でわかりにくくしてしま
う」「帝国に関する昨今の、しばしば非常にしかるべき有力な学術的著
作」に対する批判である。この「有力な学術的著作」が具体的には何か
は不明ではあるものの、「具体的な要素」ではなく「認識論や人種」に
集中する傾向を持つものの一つがポストコロニアル研究であることは間

違いない。続けて述べるには、ブリテンに限っても、人種主義の過去に
おける人種の修辭や人種的イデオロギーを示せば、帝国の存在を説明し
た、と考えるのは早計であるとして、以下のように結んでいる。「人種
が支配の正当化のために用いられることは可能であったし、しばしば用
いられたが、それは、ブリテン帝国権力の特異な規模と限界の双方に対
する包括的な説明を提供してはいない。いつものことながら、私たちは
関係性にかかわり、諸影響と諸要因の幅広い多様性を検討する必要があ
るのであり、一方にのみ集中するのではないのだ」。

以上のように、コリーは、ポストコロニアル研究に対して、一方では
「帝国の文化史探究の高まり、時には帝国史を損なった過度の経済決定
論からの退却は、健全な進展であり、まったくの賛成」であるとしつ
つ、他方では、「認識論や人種」に集中するあまり、「帝国権力の特異な
規模や限界」、関係性、諸影響と諸要因の幅広い多様性への注意を失わ
ないように要請している。これを一つの契機として、コリーはこれから
の帝国史研究の前提や課題として、サイドを批判した上での非ヨー
ロッパの諸帝国との比較の提唱、前近代の帝国から持続する「長期持
続」のパースペクティヴ、支配と被支配との双方向からなる関係性、ブ
リテン人とは何かのアイデンティティーの探求などを、この論文の全体
を通じて挙げているのである。

ここからいえることは、コリーの姿勢は、ポストコロニアル研究が帝
国史研究の活性化に貢献した点に理解を示すものの、自身がその方法を
取り込んで、それを使用して研究を進めたとはまでは言えない。コリーが

これからの帝国史の課題としている帝国の比較、長期持続、関係性、アイデンティティーの探求といっても、ポストコロニアル研究的な「権力の言説分析」というより、すべては実証主義的な方法による追究であることには変わらないのである。

この意味では、フーコーやサイードの可能性を「ひとりの職業的な歴史家」が正面からうけとめた「伝統的な実証主義による歴史叙述ではなく、むしろ文化表象の歴史学」の作品を書いたとの富山の評価より、「ポストコロニアル研究は彼女の方法に影響を与えていない」とのケネディの評価の方が妥当ともいえる。正確には、コリーは、ポストコロニアル研究の方法によらず、あくまで実証史家として文化表象の歴史学を書いたと言えるだろう。したがって、実証史家としてポストコロニアル研究を読み、過去の研究を見直すというコリーにとって、ポストコロニアル研究と実証主義は相反発するものではなく、むしろコラボ（協働作業）するものだった。ケネディの評価によると、こうしたコラボによって「帝国主義の諸結果（効果）を幅広く細部まで理解することができし、とくに歴史研究自体についての文化的意味や認識論的な意味など多角的に明らかにできたのである」⁽⁷⁵⁾。

ポストコロニアル研究と実証研究とのコラボ

ここでは、ポストコロニアル研究から（ブリテンをはじめとする）帝国史への問題提起というよりも、これに反応してきた歴史家の受け止め方が重要と判断して、こちらの方に注目してきた。主として取りあげた

ポスト「ポストコロニアル」総合に向けて

ポストコロニアル研究に影響を受けた三人の歴史家、すなわち、ストーリー、ミッチェル、グハのうち、グハは、ケネディのいう「ポストコロニアル研究からの挑戦により、自身の学問分野の認識論的基盤への疑義を抱くようになった歴史家」とも言えるし、サバルタン研究の代表者としての姿勢を表明しているとも言える。ここまでは行かなくとも、ミッチェルは、フーコーへの傾斜度からして、ポストコロニアル研究に刺激を受けた歴史家であるが、実証史家としての姿勢も失っていないと言えよう。ストーリーは実証研究にも携わっていた研究経歴からすると、この中ではもっとも実証史家にも近い歴史家であろうが、フーコーへのこだわりも深い。彼らは、現行の帝国史が意味ある問題を提起しなくなったと感じた時に、ポストコロニアリズムが自らの「琴線に触れた」「一団の研究者」だったのである。

彼らとは対極的な位置にあつて、ポストコロニアル研究に実証史家として反発した歴史家は、ジョン・マッケンジーとデイヴィッド・キャナダインであろう。マッケンジーは伝統的な社会史や文化史の立場からサイードの『オリエンタリズム』や『文化と帝国主義』を批判した⁽⁷⁶⁾、キャナダインは、本国とその帝国の関係における、サイードのオリエンタリズムや他者性とは対極的なオーナメンタリズムや親和性を主張した⁽⁷⁷⁾。ただ、この両名にしても、すでに触れたように、マッケンジーは、「スコティッシュ・アイデンティティー」論を通じた「ブリティッシュ・アイデンティティー」論の先駆者で「アイデンティティー」には実証史家として取り組んでいたし、キャナダインに至っては、たしかに

このオーナメントリズム論は「古い帝国史」の代表とされることのある「オックスフォード講座ブリテン帝国史」の「ミニ版」とも「反動的帝国史」とまで評価されはしても、これもすでに確認しているように、帝国史が「ポストモダンリズムやポストコロニアル研究の影響力」から「形態転換を遂げ魅力が高められ」、「ナショナル・ヒストリーとグローバル・ヒストリーの間をつなぐ不可欠の架け橋を提供して、いまでは舞台の中央に躍り出ている」と、ポストコロニアル研究から帝国史への影響を認めていないわけではない。

キャナダイン編の『いま歴史とは何か』に「いま帝国史とは何か」を寄稿したコリーは、ポストコロニアル研究は「旧来のしばしば非常に価値の高い研究を再点検・再評価しうる方法をも可能にした」と評価した。コリーは、ポストコロニアル研究の利点に懐疑的なままながら「ポストコロニアル研究の挑戦に答えるべく自身の研究の再考や再設定の必要性を見出した」実証史家であり、『イギリス国民の誕生』『虜囚』をもって、ポスト「ポストコロニアル」総合の先駆者の一人と言えよう。

ケネディは、アイデンティティー、文化、サバルタンといったテーマに参入できるのはポストコロニアル研究だけではないこと、ポストコロニアル研究はこうしたポストコロニアル研究的なテーマに参入していく唯一の道ではないことを再三にわたり注意を促している。既に触れているとおり、「部族的アイデンティティー」の追究は従来の社会史、文化人類学でもなされていたし、「ブリティッシュ・アイデンティティー」も主流の社会的文化的歴史が先鞭を付けていた。「ナショナル・ヒスト

リー」の相対化はグローバリゼーションの経済史家も目指したし、一九世紀の自由主義は帝国に順応していたとの証拠は主流の歴史家によってすでに提出されていた。

こうした経過を確認すると、ある意味では今までもポストコロニアル研究と実証主義とのコラボ（協働作業）を行っていたのである。実証史家のポストコロニアル研究への距離の取り方は濃淡があるとはいえ、食わず嫌いは論評の外に置くとして、反発を示したマッケンジーやキャナダインですら、ともかく「食べてみた」では、コラボとも言える。

したがって、先に触れたこれからの帝国史研究の方向として、帝国主義の物質、文化、認識論的次元を統合したポスト「ポストコロニアル」総合というものも、今まで何もなされずすべてがこれから始まるもの、今後にかかっているというものではない。それはその先駆者コリーの仕事に見られるように、この四〇年近くのポストコロニアル研究をくぐり抜けて、そこから問題意識を汲み取り着想を得たり、何らかの意味で「コラボ」しようとしたりする実証主義的な歴史家たちが、実践してきたものであり、ポストコロニアル研究からの刺激を受けて見出されたものともいえる。

注

- (1) Dane Kennedy, 'Imperial History and Postcolonial Studies Revisited,' in Dane Kennedy, *The Imperial History Wars: Debating the British Empire*, London: Bloomsbury Academic, 2018, pp.39-40.

- (2) Edward W. Said, *Orientalism*, New York: Pantheon Books, 1978 [エドワード・W・サイード『オリエンタリズム』今沢紀子訳、平凡社、一九八六年]。
- (3) Kennedy, 'The Imperial History Wars,' in Kennedy, op.cit., p.135.
- (4) Kennedy, 'The Boundaries of Oxford's Empire,' in Kennedy, op.cit., p. 33; Ann Laura Stoler and Frederick Cooper, eds., *The Tensions of Empire: Colonial Cultures in a Bourgeois World*, Berkeley: University of California Press, p.1; Minalini Sinha, *Colonial Masculinity: The 'Manly Englishman' and the 'Effeminate Bengali' in the Late Nineteenth Century*, Manchester: Manchester University Press, 1995, p.4; ニーア・O・ローズ『ジェンダー史とは何か』長谷川貴彦、兼子歩訳、法政大学出版局、二〇一六年、二二〇～二二二頁。
- (5) Kennedy, 'Imperial History and Postcolonial Theory,' in Kennedy, op.cit., p. 156, n.75.
- (6) Kennedy, op.cit., p.33.
- (7) ジョナサン・カラー『一冊でわかる 文学理論』荒木映子・富山多佳夫訳、岩波書店、二〇〇三年、一六一～一六二頁。
- (8) ストーラーの著書は、Ann Laura Stoler, *Capitalism and Confrontation in Sumatra's Plantation Belt, 1870-1979*, Ann Arbor: University of Michigan Press, 1995, 2nd ed., [邦訳、アン・ローラ・ストーラー『プランテーションの社会史——デリ／一八七〇—一九七九』中島成久訳、法政大学出版局、二〇〇七年]; Ann Laura Stoler, *Carnal Knowledge and Imperial Power: Race and the Intimate in Colonial Rule*, Berkeley: University of California Press, 2002 [アン・ローラ・スツーラー『肉体の知識と帝国の権力——人種と植民地支配における親密なるもの』永渕康之、水谷智、吉田信訳、以文社、二〇一〇年]。
- (9) ストーラー『肉体の知識と帝国の権力』、八～九頁。
- (10) Ronald Hyam, *Empire and Sexuality: the British Experience*, Manchester: ポスト「ポストコロニアル」総合に向けて

- Manchester University Press, 1990 [ロナルド・ハイアム『セクシュアリティの帝国——近代イギリスの性と社会』本田毅彦訳、柏書房、一九九八年]。
- (11) ストーラー、同上書、一二、一四、五七頁。
- (12) ストーラー、同上書、一九～二〇、二二、二六、一七八頁。
- (13) Ann Laura Stoler, *Race and the Education of Desire: Foucault's History of Sexuality and the Colonial Order of Things*, Durham: Duke University Press 1995 [第四章の抄訳「人種の言説／階級の言語——ブルジョア身体と人種的自己を育成する」河村一郎訳『現代思想』一九九七年三月号、一〇四～一二三頁。
- (14) ミシェル・フーコー「一九七六年二月四日」、「一九七六年三月一七日」、ミシェル・フーコー『社会は防衛しなければならない——コレージュ・ド・フランス講義一九七五—一九七六年度』石田英敬、小野正嗣訳（ミシェル・フーコー『ミシェル・フーコー講義集成』六）、筑摩書房、二〇〇七年、所収、一〇三、一八二頁。
- (15) ミシェル・フーコー『性の歴史』（「知への意志」渡辺守章訳（『性の歴史』、一、『快楽の活用』田村俤訳（『性の歴史』二、『自己への配慮』田村俤訳（『性の歴史』三、新潮社、一九八六—一九八七年。
- (16) ストーラー『肉体の知識と帝国の権力』、一八〇頁。
- (17) ストーラー、同上書、二六七頁、注四。
- (18) Antoinette Burton, *Burdens of History: British Feminists, Indian Women, and Imperial Culture, 1865-1915*, Chapel Hill: University of North Carolina, 1994; ニーアンの本書については、他に、ローズ『ジェンダー史とは何か』、七二～七三頁、参照。
- (19) Kennedy, op.cit., p.43.
- (20) Leonore Davidoff and Catherine Hall, *Family Fortunes: Men and Women of the*

- English Middle Class, 1780-1850*, London: Hutchinson Education, 1987 [「L・タ
ヴァイドフ、C・ホール『家族の命運——イングラッド中産階級の男と女——
一七八〇—一八五〇』山口みどり、梅垣千尋、長谷川貴彦訳、名古屋大学
出版会、二〇一九年〕。
- (21) Catherine Hall, *Civilising Subjects: Metropole and Colony in the English
Imagination, 1830-1867*, Cambridge: Polity, 2002; ホールの本書について、他
に、ローズ『ジェンダー史とは何か』、七〇—七二頁、参照。
- (22) Kennedy, p. 42; Bernard S. Cohn, *An Anthropologist among the Historians and Other
Essays*, with An Introduction by Ranajit Guha, Delhi: Oxford University Press,
1990.
- (23) Catherine Hall and Sonya Rose, eds., *At Home with the Empire: Metropolitan
Culture and the Imperial World*, Cambridge: Cambridge University Press, 2006,
p. 10; Dipesh Chakrabarty, 'Foreword', in *The Bernard Cohn Omnibus*, New Delhi,
New York: Oxford University Press, 2004, pp. x-xi.
- (24) バナード・S・コーン「ヴィクトリア朝インドにおける権威の表象」多
和田裕司訳、E・ホプズボウム、T・レンジャー編『創られた伝統』前川
啓治、梶原景昭他訳、紀伊國屋書店、一九九二年、二八二—二八三頁。
- (25) Nicholas B. Dirks, *Castes of Mind: Colonialism and the Making of Modern India*,
Princeton: Princeton University Press, 2001.
- (26) David Arnold, *Colonizing the Body: State Medicine and Epidemic Disease in
Nineteenth-century India*, Berkeley: University of California Press, 1993 [「デイヴ
イッド・アーノルド『身体の植民地化——一九世紀インドの国家医療と流
行病』見市雅俊訳、みすず書房、二〇一九年〕; David Arnold, *The Problem of
Nature: Environment, Culture and European Expansion*, Oxford: Blackwell, 1996
[「デイヴィッド・アーノルド『環境と人間の歴史——自然、文化、ヨーロッパ
- バの世界的拡張』飯島昇藏、川島耕司訳、新評論、一九九九年〕。
- (27) E. M. Collingham, *Imperial Bodies: The Physical Experience of the Raj, c. 1800-
1947*, Cambridge: Polity Press, 2001; Lizzie Collingham, *Curry: A Tale of Cooks
and Conquerors*, New York: Oxford University Press, 2006 [「リジー・コリンガム
『インドカレー伝』、東郷えりか訳、河出書房新社、二〇〇六年、河出文庫
二〇一六年〕; Lizzie Collingham, *The Hungry Empire: How Britain's Quest for
Food Shaped the Modern World*, London: Bodley Head, 2017 [「リジー・コリンガ
ム著『大英帝国は大食らい——イギリスとその帝国による植民地経営は、
いかにして世界各地の食事をつくりあげたか』松本裕訳、河出書房新社、
二〇一九年〕。
- (28) Carl Bridge and Kent Fedorovich, "Introduction: Mapping the British World," in
Carl Bridge and Kent Fedorovich, eds., *The British World: Diaspora, Culture and
Identity*, London: Frank Cass, 2003; Stuart Ward, "Imperial Identities Abroad," in
Sarah Stockwell, *The British Empire*, Oxford: Blackwell, 2008; 竹内真人編著
『ブリティッシュ・ワールド：帝国紐帯の諸相』日本経済評論社、二〇一九
年。
- (29) Kennedy, p. 45 にあると、その一例は以下である。Adele Perry, *On the Edge of
Empire: Gender, Race, and the Making of British Identity 1849-1871*, Toronto:
University of Toronto Press, 2001.
- (30) Sinha, op. cit.; S・ベダーセン「『ま政治史とは何か』、平田雅博訳、所収、
D・キャナダイン編著『いま歴史とは何か』、平田雅博・岩井淳・菅原秀
二・細川道久訳、ミネルヴァ書房、二〇〇五年、八二頁。
- (31) Kennedy, op. cit., p. 44.
- (32) さしあたり以下を参考。ジョン・M・マッケンジー「四つのネーション——
イングランド、アイルランド、スコットランド、ウェールズとブリテン帝

国」、平田雅博訳、青山学院大学文学部『紀要』第五六号、二〇一五年。

- (33) Linda Colley, *Britons: Forging the Nations 1707-1837*, London: Pimlico, 1992 (リ
ンダ・コリー『イギリス国民の誕生』川北稔監訳、名古屋大学出版会、二〇
〇〇年)。

- (34) G・A・ポーコック「ブリテン史新たな主題に向けた訴え」中村逸春訳、
所収、J・G・A・ポーコック『鳥々の発見——「新しいブリテン史」と政
治思想』犬塚元監訳、名古屋大学出版会、二〇一三年。

- (35) これもさしあたり、ジョン・M・マッケンジー「ブリテン帝国史革命——マ
ンチェスター大学出版会「帝国主義研究」シリーズ、三〇年間に一一〇
冊」、平田雅博・細口泰宏訳、『青山史学』第三三三号、青山学院大学文学部
史学研究室、二〇一五年。

- (36) テイモシー・ミッチェル『エジプトを植民地化する——博覧会世界と規律
訓練の権力』大塚和夫・赤堀雅幸訳、法政大学出版局、二〇一四年 (Timothy
Mitchell, *Colonising Egypt*, Berkeley: University of California Press, 1991.) 一〇
頁。

- (37) ミッチェル『エジプトを植民地化する』xii, xiii, 二〇―二二頁。

- (38) ミッチェル、同上書、viii, x頁。

- (39) ミッチェル、同上書、viii頁。

- (40) Kennedy, op.cit., p.48.

- (41) Frantz Fanon, *The Wretched of the Earth*, Harmondsworth, Middlesex: Penguin
Books, 1967, pp. 29-30 (Frantz Fanon, *Les damnés de la terre*, Paris: François
Maspero, 1961; フランツ・ファノン『地に呪われたる者』鈴木道彦・浦野衣
子訳、みすず書房、一九九六年)。

- (42) ミッチェル、同上書、二四一―二四二頁。

- (43) たとえば、David Arnold, *The Tropics and the Traveling Gaze: India, Landscape,
ポスト「ポストコロニアル」総合に向けて*

and Science, 1800-1856, Seattle: University of Washington Press, 2006.

- (44) Partha Chatterjee, *The Nation and its Fragments: Colonial and Postcolonial
Histories*, Princeton: Princeton University Press, 1993; Partha Chatterjee, *The
Politics of the Governed: Reflections on Popular Politics in Most of the World*, New
York: Columbia University Press, 2004 (パルタ・チャタジー『統治される人び
とのデモクラシー——サバルタンによる民衆政治についての省察』田辺明生・
新部亨子訳、世界思想社、二〇一五年)。

- (45) Tracey Banivanua-Mar, *Decolonisation and the Pacific: Indigenous Globalisation
and the Ends of Empire*, Cambridge: Cambridge University Press, 2016.

- (46) Paul Gilroy, *The Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness*, London:
Verso, 1993 (ポール・ギルロイ『ブラック・アトランティック——近代性と
二重意識』上野俊哉・毛利嘉孝・鈴木慎一郎訳、月曜社、二〇〇六年)。

- (47) Tony Ballantyne, *Orientalism and Race: Aryanism in the British Empire*,
Basingstoke: Palgrave, 2002; Tony Ballantyne, *Between Colonialism and Diaspora:
Sikh Cultural Formations in an Imperial World*, Durham: Duke University Press,
2006.

- (48) Kennedy, op.cit., pp.48-50.

- (49) Ranajit Guha, *History at the Limit of World-history*, New York: Columbia
University Press, 2002. [「ラナジット・グハ」世界史の脱構築——ヘーゲルの
歴史哲学批判からタゴールの詩の思想へ』竹中千春訳、立教大学出版会
丸善雄松堂(発売)、二〇一七年]。他の邦訳書として、R・グハ『ほか』『サ
バルタンの歴史——インド史の脱構築』竹中千春訳、岩波書店、一九九八
年は、グハ編『サバルタン研究』[Ranajit Guha, ed., *Subaltern Studies: Writings
on South Asian History and Society*, Delhi: Oxford University Press, 1982.] から
1 (一九八二) から三本 (うちグハ二本) 2 (一九八三) からグハ一本、

- 3 (一九八四) から一本、4 (一九八五) から一本 (スピヴァック) を選んで邦訳したもの。また、共編著として、サイドが序文を寄せて、オリエンタリズム論とも結びついたブームを起こし、サバルタン研究の世界的デビューとも評価される以下がある。Ranjit Guha and Gayatri Chakravorty Spivak, eds., *Selected Subaltern Studies*, New York & Delhi: Oxford University Press, 1988.
- (50) 竹中千春「訳者まえがき」、グハ『世界史の脱構築』、xii、xxiv頁。
- (51) グハ『世界史の脱構築』、一〇二、四〇五、四四、四八頁。
- (52) グハ、同上書、五四頁、第四章。
- (53) Kennedy, op.cit., p.53.
- (54) グハ「反乱鎮圧の文章」、グハほか『サバルタンの歴史』所収。竹中千春「訳者まえがき」、グハ『世界史の脱構築』、ix-x頁。
- (55) グハ「反乱鎮圧の文章」、八五〜八六頁。
- (56) Kennedy, op.cit., p.53.
- (57) Dirks, op.cit., chap.6.
- (58) Annette Burton, *Dwelling in the Archive: Women Writing House, Home, and History in Late Colonial India*, Oxford: Oxford University Press, 2003; Annette Burton, ed., *Archive Stories: Facts, Fictions, and the Writing of History*, Durham: Duke University Press, 2005.
- (59) Dipesh Chakrabarty, *Provincializing Europe: Postcolonial Thought and Historical Difference*, Princeton: Princeton University Press, 2000.
- (60) Uday Singh Mehta, *Liberalism and Empire: A Study in Nineteenth-century British Liberal Thought*, Chicago: University of Chicago Press, 1999.
- (61) Sankar Muthu, *Enlightenment against Empire*, Princeton: Princeton University Press, 2003.
- (62) David Armitage, *The Ideological Origins of the British Empire*, Cambridge: Cambridge University Press, 2000 [D・アーミティージ著「帝国の誕生——ブリテン帝国のイデオロギー的起源」、平田雅博・岩井淳・大西晴樹・井藤早織訳、日本経済評論社、二〇〇五年]；David Armitage, *Foundations of Modern International Thought*, Cambridge: Cambridge University Press, 2013 [D・アーミティージ著「思想のグローバル・ヒストリー」、平田雅博・山田園子・細川道久・岡本慎平訳、法政大学出版局、二〇一五年]。
- (63) Bernard Semmel, *The Rise of Free Trade Imperialism: Classical Political Economy, the Empire of Free Trade and Imperialism 1750-1850*, Cambridge: Cambridge University Press, 1970, first paperback ed., 2004.
- (64) Duba Ghosh, *Sex and the Family in Colonial India: The Making of Empire*, Cambridge: Cambridge University Press, 2006; Kennedy, op.cit., pp.52-53.
- (65) ケネディは二一世紀になってから公刊された一冊の著作を挙げている。Kennedy, pp.54-55.
- (66) Edward W. Said, *Culture and Imperialism*, New York: Alfred A. Knopf, 1993 [エドワード・W・サイーン『文化と帝国主義 (一) (二)』大橋洋一訳、みすず書房、一九九八〜二〇〇一年]。
- (67) Gayatri Chakravorty Spivak, *A Critique of Postcolonial Reason: Toward a History of the Vanishing Present*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1999 [G・C・スピヴァック『ポストコロニアル理性批判——消え去りゆく現在の歴史のために』上村忠男・本橋哲也訳、月曜社、二〇〇三年]。
- (68) コリー『イギリス国民の誕生』、八頁。
- (69) コリー、同上書、一頁。
- (70) Linda Colley, *Captives: Britain, Empire and the World 1600-1850*, London: Jonathan Cape, 2002 [リンダ・コリー『虜囚——一六〇〇〜一八五〇年のイギ

リス、帝国、そして世界』中村裕子、土平紀子訳、法政大学出版局、二〇一六年」。

- (71) 以上、富山多佳夫、解説「渦を作る、そして中心に」、シェリー・ワリア『サイドと歴史の記述』永井大輔訳、岩波書店、二〇〇四年、一一〇～一一一頁。

- (72) Kennedy, *op.cit.*, p.44.

- (73) リンダ・コリー「いま帝国史とは何か」、細川道久訳、D・キャナダイン編著『いま歴史とは何か』所収。

- (74) キャナダイン「序文」、キャナダイン編、同上書、v-vi頁。

- (75) Kennedy, *op.cit.*, p.55.

- (76) John M. MacKenzie, *Orientalism: History, Theory and the Arts*, Manchester: Manchester University Press, 1995 [ジョン・M・マッケンジー『大英帝国のオリエンタリズム——歴史・理論・諸芸術』平田雅博訳、ミネルヴァ書房、二〇〇一年]。

- (77) David Cannadine, *Ornamentalism: How the British Saw their Empire*, London: Allen Lane The Penguin Press, 2001 [D・キャナダイン『虚飾の帝国 オリエンタリズムからオリナメンタリズムへ』平田雅博、細川道久訳、日本経済評論社、二〇〇四年]。

- (78) Stephen Howe, 'Introduction: New Imperial History,' in Stephen Howe, ed., *The New Imperial Histories Reader*, London: Routledge, 2010, p.17, n.3.